肢病専だより

平成３０年１２月２８日発行　　第２号

宮城県特別支援教育研究会
肢体不自由病弱虚弱教育専門部
（ 事務局　宮城県立船岡支援学校 ）

第２号は，夏季休業中に行われた会員研修Ａと，１１月に行われた東北特別支援教育研究大会宮城大会第８分科会（会員研修Ｂ）の報告を中心にお伝えします。

【会員研修Ａ】

期日：平成３０年８月８日(水)
会場：障害者支援施設ふぼう（村田町沼辺）
内容：障害者支援施設「ふぼう」見学

会員研修Ａは村田町にある障害者支援施設「ふぼう」様の見学を行いました。

「ふぼう」は平成２９年１２月に村田町沼辺に建てられましたが，その歴史は古く，宮城県の肢体不自由児・者にとって重要なものでした。昭和４２年に「宮城県整肢不忘学園」として宮城県が白石市大鷹沢大町に開設しました。その時から重度の身体障害がある人を主に，入所施設として医療や介護を行ってきました。その後，制度などの変更があり，「宮城県不忘園」，「不忘園」と名称が変わり，運営主体も宮城県から社会福祉法人宮城県身体障害者福祉協会に移りましたが，身体に障害のある方の生活を支えてきたことに変わりはありません。また，船岡支援学校の分校が昭和４３年４月から昭和６２年３月まであり，肢体不自由児の学び舎でもありました。施設の老朽化や利用者の利便性を高めるために，村田町に施設を移転新築し，施設名も「不忘園」から「ふぼう」となりました。

今回の研修では施設を見学させていただき，施設長の佐藤秀美様から移転の経緯や運営方針，職員と利用者の状況などのお話を伺いました。移転するに当たり，地域と交流しやすいことや利用者が買い物などに行きやすいこと，土地に十分な広さが用意できることなどに留意したことを伺いました。現在，利用者は約６０人で，平均年令は４３.４歳です。仙台市や塩釜市の方もいますが，仙南地域の方が９割位です。この他にショートステイの相談や申し込みをしている人も多いそうです。職員は約６０人です。不忘園の頃から継続して働いている方と新しい方が共同で取り組んでいるそうです。

運営理念は「一人ひとりの思いを丁寧に受け止め，人として当たり前の生き方が地域の中の一人として出来るよう支援する」で，運営方針としては次の３点とのことです。

・利用者の思いが達成できるよう支援をすること（個々の意思及び人格を尊重すること）
・人として当たり前の生き方ができるよう支援をすること（専門分野と連携を取りながら）
・地域の中で支え合い，安心安楽な生活が送れるよう支援をすること（近隣市町村の障害福祉サービス事業所や保険医療サービス提供施設との密接な連携）

施設を拝見して以下のような点で，利用者と介護者に配慮されているとてもすばらしい施設で，運営理念や運営方針を具現化しているものだと感じました。

・ソーラーシステムの導入とオール電化による熱源によるクリーンで安全な生活環境
・平屋の建物にしているので，火災などで万が一避難する場合に対応しやすいこと
・地震等の災害時に避難所としての機能をもっていること
・プライバシー保護のための完全個室化と家族部屋（ご夫婦の部屋）の提供
・個室化により，利用者個々の体調に合わせた温度設定が可能な空調設備
・生活しやすくするために，高さ調整可能な洗面台の設置，明るさが調整できる照明機器

・利用者の実態に合わせて入浴の支援を行えるように，普通の浴槽とリフトを利用する浴槽，ミスト浴ができるものと数種類用意されていること
・介護時の負担を軽減するための天井走行リフトや床走行リフト
・ホールに高さ５メートル，幅１２メートルの宮城の四季と森に集う動物たちをテーマにした壁画（大河原町在住の塗装用ローラーで絵を描くさとう氏による作品）
・開放的な食堂と，そこに利用者に合わせて高さが変えられるテーブルを用意していること
・リハビリテーションの部屋と専門職（ＰＴ）の用意
・ある利用者が愛着のある樹をその方のために白石市の不忘園から移設したこと
・畑作業が好きな利用者が村田町に移転してもできるように畑を用意したこと
・遠方から会いに来た家族が泊まれるための部屋を用意していること
・廊下の壁に職員の喫煙率やハラスメントについてのアンケート結果などを張り出していること（利用者やその家族に情報をできる限り公開していること）

【会員研修Ｂ】

期日：平成３０年１１月１６日(金)
会場：宮城県立西多賀支援学校
内容：第５６回東北特別支援教育研究大会宮城大会第８分科会（兼：平成３０年度肢病専会員研修Ｂ）
本専門部のテーマである「一人一人が生きる肢体不自由・病弱虚弱教育の在り方を求めて」を分科会テーマとして設定し，以下の先生方に話題提供者，助言者としてご参加いただきました。
助　言　者：国立大学法人 宮城教育大学　准教授　寺本　淳志　氏
話題提供１：宮城県立西多賀支援学校　教諭　白石　康　氏
内容「病弱特別支援学校の進路指導について」～大学進学が実現するまで～
話題提供２：秋田県横手市立横手南小学校　教諭　上田　健　氏
内容「肢体不自由児童のコミュニケーション力を育む取組」～A児の事例を通して～

〈話題提供１〉では，白石先生からここ数年の実例をもとに大学進学へ向けての進路指導の実際についてお話しいただきました。３つの事例の紹介があり，自校内での基礎学力育成のための対応や，進路希望校との折衝，それによる相手校の対応などの説明がありました。特に相手校の対策の具体例として，施設改修，保健師や支援員の雇用，修学期間の延長許可，厚生労働省の補助金による介助の経費負担，学生支援センターの立ち上げについて詳しい解説があり，地域生活支援事業などの公的な支援を利用しつつ，受験，進学後の環境を整備していくことが重要であるというお話をいただきました。

質疑では，小中学校の先生から，医療的ケアの必要性や情報の不足から，普通高校などへの進学を早々に諦めてしまうというお話があり，情報の周知や，学校と関係機関との相談や話し合いの重要性について改めて考えさせられました。

助言者の寺本先生からは以下のようなご助言をいただきました。

障害者学習支援体制ができていて，障害者を受け入れるために先回りして動くことができる大学は少なく，多くの大学は，実際に学生が入学しないと，予算の面など実質的な動きが取れないのが現状である。事前に高校の先生方から様々な情報があれば，大学側も早期から合理的配慮に取り組めるのではないかと考える。

また，支援学級や支援学校出身の学生の中には，「自立活動で教科的な学習ができていたら，もっと進学の不安がなかった」という話をする人がいる。しかし，自立活動で教科の中身を扱うことは難しい問題である。今回学習指導要領の改定に伴い，主体的に学ぶという点が強調された。大学進学を目指す生徒の中で，特に学習空白がある生徒は，「学習空白を克服する」という話が受け取りやすいのではないかと思う。

よく見られる学生の課題として，コミュニケーションスキルの不足や人との関わり方の弱さが挙げられる。そこは大学側の支援が限られ，支援スタッフも入りづらい点である。高校の段階で大学の授業を受けるイメージをもたせ，求められる力の獲得にアプローチし，その実態を大学に伝えてもらうと，大学側も先回りした合理的配慮に取り組めると考える。最後に，学習支援に携わるスタッフの中では，「移動の支援をどうするか」といったお金の話がよく出る。その点は今回提示された新しい制度を紹介するとよいと思われる。

〈話題提供２〉では，上田先生よりコミュニケーション力を育む取組についてお話しいただきました。事例対象の児童は，交流学級で１日の大半を過ごしてきたことにより受け身でいることが多く，将来，自立して生活するためには，「自分の気持ちや考えを伝える力」を身に付けていく必要があると考え指導に当たったそうです。

以下のような改善と工夫について説明いただきました。

① 他との関わりを広げ社会性を育てるための学校生活の場の見直し
　ア　自分から進んで体を動かすことができる教室環境
　イ　体験活動や人との関わりを重視した教育課程の見直し
② 将来の生き方に関わるコミュニケーション能力を高めるための工夫
　ア　早期からの就学支援
　イ　自分から人との関わりをもつための話し方やスキルの指導
　ウ　教科・領域との関連でのコミュニケーション指導

また，成果と課題として以下のような説明をいただきました。

① 環境を変え，人との関わりを工夫したことにより，自分のペースで生活できるようになり，自分からできることをやろうとすることが多くなった。
② 体験活動や人との関わりを重視したことによって，自己有用感が高まった。
③ 将来の自分の姿として，できるだけ自立して活動できる自分を思い描くようになり，バリアフリー施設の整った中学校への進学の意思をもつようになった。
④ 受け身の姿勢でいることの多かったA児が，自らできることをやろうとすることが増えた。

質疑では，生活の場の見直し（交流学級→支援学級）についての保護者の反応や，交流学級という集団の場にいることによる良い点をどう考えるかなど，集団の中での活動が重視される現状において，本事例に対しての疑問点が出されました。それに対し，集団の生活の中で生活することの重要性を認めた上で，今回の事例では，マイナス面に着目し個での指導を重視することで効果があり，集団生活の全てを排除するものではないといったお話がありました。プラス面があればマイナス面があり，そのバランスをとることの大切さを考えさせられるお話でした。

助言者の寺本先生からは，以下のような指導助言をいただきました。

できるだけ通常学級で過ごさせたいと思う保護者は多いと思う。しかし，それが適切かと考えたときにそうではない子供も当然いるのでこの実践はとても参考になる。日本のインクルーシブ教育は，必ずしもみんなが同じ場所でやらなければならないということではない。他の特別支援学級との交流であったり，通常の学級との交流であったりといくつかの場を校内で使い分けるというのはまさに文科省が言っている連続性をもった学びの場を体現している。交流学級の集団の規模が大きすぎるのであれば，特別支援学級に通常のクラスから数人ずつ来てそこで関わりをもつという「逆交流」という形も考えられる。

午前中のみという非常に限られた時間内での分科会となりましたが，２つの事例についてお話しいただき，中身の濃い研修となりました。

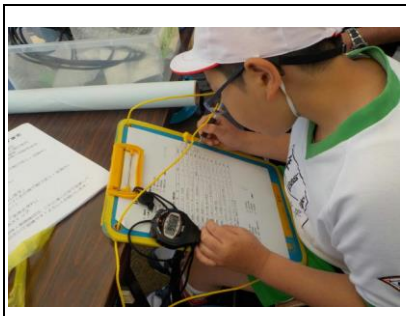
～教室の窓から～

大崎市立松山小学校
教諭　小笠原　健

ただいま挑戦中

入学時より車椅子で生活している５年生のＡさん。友達と楽しく関わりながら，いろいろなことに挑戦できるように配慮や支援を工夫しています。今回はそんなＡさんの様子を紹介します。

５月の運動会では，徒競走や全員リレー，全身を大きく動かした松小ソーランなどたくさんの拍手を受けて頑張りました。



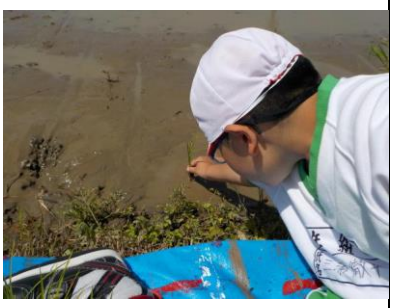
移動の困難さに配慮した係活動（計時記録係）

スタートの位置や移動距離，バトンの位置や受け渡しを工夫した全員リレー

異年齢集団との交流（６年生による 松小ソーラン伝講会）

総合的な学習の時間では，地域の方々の協力を得ながら米づくりを行っています。Ａ君もみんなと同じ体験をしながら，楽しく活動に取り組んでいます。

座位保持を支援する手製の座布団や作業しやすい高さの作業台



苗を植える位置や手を伸ばしやすい ように支持を工夫した田植え

ひざで挟み込み下半身を安定させ，鎌を引く手の補助をした稲刈り

同学年の児童と一緒に活動する機会が多いＡさん。できるだけみんなと同じ経験ができるように配慮や支援を行っています。体験を共有することで，集団への帰属意識を高めさせるとともに，自分もできたという充足感をもたせることが次の活動への意欲につながると考えています。今後も自分も楽しみながら，
Ａさんの素敵な笑顔がたくさん見られるよう取り組んでいきたいと思います。

走るコースは異なるが，来場者の声援を受けられるように同学年の児童と同時にスタートし，多くの声援を受け，休まずに５００Ｍを完走した持久走大会